
観化堂の隊長

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

観化堂の隊長

【Nコード】

N2827G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

台湾に彼女と一緒に来た。そこでガイドさんに案内された山のお堂は僕達が始めて見聞きする日本と台湾の姿だった。第二次世界大戦で散華した広枝警部のことを書きました。

第一章

観化堂の隊長

何度来たかわからない。台湾は本当にいいと思う。

「まず食べ物が美味しい」

僕はもう馴染みになっている広東料理の店に入って言った。

「この海鮮麺にしてもね」

「あんだねえ」

向かいにいるのは彼女の岩本玲子だ。子供の頃は太っていたらしいけれど今は程よく痩せて白い肌と細い目が印象的な娘だ。まあ美人といってもいい。黒いショートカットには個人的にこだわりのあるみたいでいつもこの髪型だ。

「そうは言っても食べ過ぎじゃないの？」

「そうか？」

「そうかも何もよ」

玲子は呆れたようにして僕に言ってきた。

「麺類だけじゃなくてね」

「ああ」

「点心だつて大分食べてるじゃない」

「美味しいからね」

こう答えるだけだった。けれど確かに僕の周りにはやたら皿が集まっている。とりあえず豚料理と海鮮ものにはこだわっているつもりだった。

「台湾のお店はね」

「まあ美味しいことは美味しいわね」

玲子もそれは認めてきた。

「けれど。それでもこれだけ食べるなんて」

「駄目なのかい？」

「駄目っていうかね」

惘然としてまた言ってきた。

「炒飯食べたわよね」

「海鮮炒飯ね」

「それに点心は」

「海老蒸し餃子にフカヒレ餃子に海老焼売に豚バラ煮込みにね」

「他には」

「あとこれかな」

見れば他にも頼んでいて食べていた。

「ああ、これこれ」

「ビータンね」

「あと野菜はこれだよ」

八宝菜も頼んでいた。食事のバランスに気をつけるとか言って注文して食べていた。

「それと海月の酢の物もね」

「結構食べてるなあ」

「結構どころじゃないわよ」

また惘然とした顔で僕に言ってくるのだった。

「それだけ食べて。しかもデザートも頼んでるじゃない」

「健康的にフルーツにしてるよ」

「ライチに桃に葡萄ね」

「これだけ食べれば栄養は万全じゃない」

「栄養の問題じゃないわよ」

口を尖らせてまた僕に言ってきた。

「それだけ食べたら太るわよ」

「そんなのは承知のうえだよ」

平気な顔で玲子に返した。

「そんなことはね」

「だから幾ら食べても平気なのね」

「食べれば食べるだけ入るお腹なんだ」

「便利なお腹ね」

目がやけにクールだった。素直に褒めているわけじゃないのはそれでわかる。

「中に何かいるんじゃないの？」

「実はさ」

「ええ」

「お腹の中に蛇を飼ってるんだよ」

思いきり嘘を言ってみた。ここで海鮮麺も食べ終わった。

「それでこれだけ食べないと駄目なんだよ」

「ふうん。じゃあちゃんちゃんこや下駄を飛ばしたり髪の毛を飛ばしたりするのね」

「髪の毛は勿体無いね」

実は抜け毛は少しだけ気になってる。遺伝では家族にそうした人間はいないがそれでも気にはしている。男で気にならない奴もいると思う。

「だからそれはね」

「じゃあ今度妖怪退治を頼むわ」

向こうも冗談に乗ってきたがそれでも冷めた目だった。

「機会があればね」

「そうしてよ。ところでさ」

「今度は何？」

「明日だけれど」

今度はそうした話をした。

「何処に行くんだっけ」

「確か苗栗県よ」

「何処、そこ」

食べ物と一緒に頼んであったワインを飲みながら尋ねた。はつきり言って全然聞いたこともない場所だった。本当にそんな場所が台湾にあったかしらと話をしながら疑問にさえ思った。

第二章

「聞いたことないけれどさ」

「それが私もよく知らないのよ」

玲子の方もこう返してきた。

「どんな場所かって言われても」

「何だよ、知らないのかよ」

こう言われると僕の方も何て言えばいいのかわかりかねた。とりあえずワインを飲む。個人的には中華料理には赤が合うと思っっている。それで。見たら日本産、甲州ワインだった。どうも日本人の観光客のことを考えてこのワインにしているらしい。そういえば台湾のワインはあまり聞いたことがない。中国のならあるが。

「玲子も」

「少なくともこことは違うらしいわ」

「台中とは？」

「ええ。こう言ったら何だけれど」

「田舎なのかな」

今僕達が楽しくやっているここは台中という。台湾では大きな街の一つだ。ここにも何度か来てそれで今いる店とも馴染みになっているというわけだ。

「ひよっとして」

「ひよっとしてじゃなくてもそうみたい」

玲子も玲子で食べて飲んでいいる。フルーツを食べてついでにワインもやっている。食べているのはよく見なくても僕と同じものばかりだ。ただし僕の方がかなり食べてはいる。

「それも結構ね」

「ふうん。それでも何かあるんだろうね」

「お寺かしら」

玲子はふと思ひ出したように言ってきた。

「それって。お寺かしら」

「そうじゃないの？」

僕も特に考えることなく答えた。

「中国のさ。ほら、道観」

「ああ、あれね」

それが何なのかは玲子にもわかった。僕の言葉にすぐに頷いてきた。

「あれなのね」

「そう、あれじゃないの？」

僕は特に考えることなく玲子に話した。

「あれをさ。見に行くんじゃない」

「台湾にいたらよく見るものじゃない」

玲子は首を少し捻って述べた。

「それなら」

「そうだよ。けれど何で行くんだろ」

「さあ」

「ガイドの馬さんに聞いてみる？」

「そうね。それじゃあ」

ここで玲子は自分の椅子の横に置いてあったバッグの中から携帯電話を取り出した。それでメールを打とうとするがすぐに止めた。

「今は止めておくわ」

「お店の中だよ」

「そう、だからよ」

彼女もそのことに気付いたようである。

「止めておくわ。無作法だからね」

「そういうことだよ。だから後でね」

「ええ。馬さん何処にいるの？」

僕は今度はこのことを玲子に尋ねた。

「馬さん。ホテルだったっけ」

「確かそうだったと思うわよ」

玲子は目を右斜め上や左斜め上にやって考える目をしたうえで僕に述べてきた。かなりワインを飲んでいるのに思考力は落ちていないらしい。それは僕もだが。

「今はね」

「そう。だったらホテルに行つて聞く？」

「ええ、そうしましょう」

玲子も僕の考えに賛成してきた。

「それで充分間に合うしね」

「そうしようか。じゃあまず」

「食べるの？」

「そう、全部ね」

僕はまたデザートを手を取った。ライチの皮を剥く。甘くて冷たい果汁が溢れ出てその中から白いミルクの色をした果肉が出て来た。割れ目から赤い種が見える。

第三章

「食べよう。頼んだものは全部食べないと」

「一片だけ残してるよね」

「勿論」

にこりと笑って答えた。このことは忘れない。中国圏だと食事をほんの少しだけ残しておくのが満足したという証なのだ。中国圏独特だ。

「ほら、こうしてね」

「合格ね。じゃあ後は」

「うん、食べてしまおう」

「ええ、努力してね」

こうして二人で頑張って残りも食べた。そのうえでお勘定を払ってお店を後にした。そして朴達が泊まっているこれまた馴染みのホテルに戻った。台湾ではまあそこそのホテルで内装も設備もしっかりしている。その赤紫の絨毯と白い壁のロビーに行くと丁度もう八十をかなり越えているお爺さんが椅子に座っているのが見えた。この人だった。

「あつ、馬さん」

「そこにいたんですね」

「ああ、おやおや」

お爺さんは僕達の声の聞いて愛想よく顔を向けてくれた。御歳のわりには姿勢もいいし動きも早い。屈託のない愛嬌のある笑顔を僕達に見せてくれた。

「早いな、二人共」

そして流暢な日本語で返してくれた。台湾はかつて日本領だったことは知っているけれどそれでもかなりいい日本語を話している。

「もう食べたのかい？」

「ええ、あの店で」

「もつたつぷりと」

「そうかい。それはいいね」

「ところでですね」

「うん？」

そして玲子が馬さんに尋ねたのだった。

「明日ですけれど」

「明日行く場所かい？」

「苗栗県ですよ」

「うん、そこだけれど」

「何処に行くんですか？」

玲子は怪訝な顔で馬さんに尋ねていた。

「その何処に」

「獅頭山だけれど」

「獅頭山！？」

「何処だろ、それ」

「さあ」

僕達は馬さんの話を聞いてもさっぱりわからなかった。ただ顔を
見合わせ不思議な顔をするだけだった。

「全然わからないわよね」

「うん」

「ああ、そのうちわかるよ」

けれど馬さんは陽気に笑って僕達にこう言うのだった。

「そのうちっていうか明日にね」

「明日にですか」

「そう、いけばわかるよ」

また僕達に言う馬さんだった。

「それでね」

「ひょっとして道観ですか？」

ここでまた玲子が馬さんに尋ねた。

「行く場所って」

「まあそこだね」

それは馬さんも認めてくれた。

「道観なんだけれどね」

「道教の神様かな」

「関羽菩薩みたいなもの？」

また僕達は顔を見合わせて言い合った。中国人、海外では華僑になるが中国圏の人達がいる場所では絶対にあるものだ。横浜にもあるあの関帝廟のことだ。

「ああいうものかな」

「そうじゃないの？」

「そんなものだね」

馬さんは少し考える顔になってからまた僕達に述べた。

第四章

「あそこはね」

「そういう場所なんですか」

「じゃあ祭られている神様は何かな」

僕達は今度はこのことについて考えた。

「岳飛かな」

「ああ、その人じゃないよ」

これもまた馬さんによつて否定された。

「岳王廟ではないよ」

「そうなんですか」

「あんた達にも関係のある人だけけどね」

「私達につて」

「誰かな」

「さあ？」

やはり僕達にはわからない。また顔を見合わせるだけだった。

「とにかく明日ですよね」

「そう、明日だよ」

その屈託のない笑みで僕に答えてくれた。

「明日ね。それでいいね」

「ええ、わかりました」

「じゃあ明日」

こうしてとりあえず僕達の明日の行動予定は決まった。おじさんから話を聞いた後は台湾の街を三人で歩いて遊んだ。その遊びから帰って来て僕と玲子は部屋に入りシャワーを浴びてからベッドに向かい合つて明日の話をした。二人共白いガウンを着ている。

「それでね」

「うん」

ガウンで頭にタオルを巻いている玲子の話を聞く。僕はガウンの

下にズボンを穿いている。

「明日の獅頭山ってどんなところなのかしら」

「ここに書いてあったよ」

「あつ、それって」

玲子は僕が出して来たガイドブックを見て声をあげた。これは僕達が日本から持って来たガイドブックだ。日本にいれば旅行に関する資料にはこと欠かない。

「ここにあるんだけれどね」

「ええ」

「ほら、この本だと」

「あまり高くない山ね」

玲子は僕が開いたそのページを覗き込んでまずはこう言った。

「五百もないのね」

「うん。高くはないね」

これは僕もわかった。

「それにさ。道観よりも」

「仏教みたいね」

玲子はまたガイドブックを見て言った。

「どうやらね」

「そうみたいだね。お寺が有名だけれど」

「けれどお爺さんって」

玲子は眉を顰めさせて僕にさっきの話を言ってきた。

「言ったわよね。道観って」

「うん。確かにね」

「何でかしら」

また言う玲子だった。

「仏教の場所で道観行くなんて」

「しかもさ」

僕はここでお爺さんの言葉を一つ思い出した。

「あれじゃない。僕達に関係があるって」

「私達別に」

玲子はどこで首を傾げさせてきた。ベッドの上で正座を崩した格好で座っている彼女の白い足が見えるけれど今はそれよりもこちらの話だった。

「台湾には。観光で来てるだけだし」

「そうだよ。関係ないよね」

「そうよね。けれど何でかしら」

「わからないことばかりだよ」

僕はついついこう言った。

「お爺さんの話は」

「それでも明日はそこなのよね」

「うん」

これはもう決まっていることだった。

「それはね」

「じゃあさ。ここはさ」

お爺さんが悪い人じゃないのはわかっていた。だからここは腹を括ることにした。

「もう。決める？」

「決めるの」

「うん。もうこれでいいよ」

僕はまた玲子に言った。

「道観ならそれはそれでね」

「そうね。それじゃあ」

「うん。まあ山は調べたしさ」

僕はこれで話を打ち切ることにした。

「もう寝ようか」

「そうね。それじゃあ」

「その前に飲む？」

「ここでまた玲子に提案した。
「ビール。買ってあるけれど」

「もう買ってあるの」

「下のコンビニでね」

こう言って部屋のテーブルの上を親指で指し示す。薄明かりだけの部屋の中でビニールの袋に包まれたビール缶とつまみが入っている。

第五章

「買っておいたんだ」

「ああ、あそこでね」

「飲む？」

「ええ。けれどね」

玲子はここで少し苦笑いになった。

「日本にいるみたいね。何か」

「日本語も結構通じるしね」

「そうよね」

台湾はそういう場所だ。昔日本領だったこともあるし今は日本の観光客が多いので結果として日本語がかなり通じるようになっていくのだ。

「親しみも感じるわね」

「うん。それじゃあ」

「飲みましょう」

こう言って前に動いてきた。

「早速ね」

「飲んだら寝てね」

「明日に備えましょう」

「うん、そうしよう」

こうして僕達はまた飲んでそれから二人でベッドに入って身体を休めた。朝起きて一介のホテルのレストランでホテルのお粥の朝食を食べていると馬さんが来た。

「お早うございます」

「はい、お早うございます」

僕達は馬さんの挨拶に笑顔で応えた。馬さんは朝から元気な顔だった。

「じゃあそれを食べたらずね」

「はい」

「身支度を整えて行きましょう」

「わかりました。それじゃあ」

「獅頭山にですネ」

「案内は私に任せて下さい」

「屈託のない顔で僕達に言ってきた。

「それでいいですよネ」

「ええ、御願ひします」

「それで」

僕達としても異論はなかった。こうして僕達はこの中華風の中に豚の内臓が入っている所謂及第粥を食べてから齒を磨いて顔を洗ってから馬さんについて獅頭山に向かった。そこはガイドブックに書かれてある通り緑が豊かな奇麗な山であった。

馬さんが運転する日本車から降りて外に出ると。馬さんはすぐに僕達に声をかけてきた。麓のここからも見える仏教のお寺には目もくれていなかった。

「それじゃあですネ」

「道觀ですよネ」

「はい、そこです」

答えは変わらなかった。

「そこに行きますよ」

「またどうして」

僕は思わずまた馬さんに尋ねた。

「そこに行かれるんですか？」

「そうですよ」

そして玲子もそれに続く。

「何で道觀に」

「僕達にも関係があるって仰いますけれど」

「まあ行けばわかりますから」

またこう言われた。

「その時にね」

「それじゃあまあ」

「行きますけれど」

僕達はこうは答えたがそれでも釈然としないものが残っていたのは確かだった。そしてそれを隠すこともできなかった。どうしてもだ。

だがそれでもだった。馬さんの案内について山を登った。そして暫くしてその道観らしい場所に来た。見たところ何の変りもない普通の道観である。僕も玲子もその前で首を傾げざるを得なかった。

「ここなんですか？」

「ここが？」

「はい、ここですよ」

馬さんは穏やかな笑顔でまた僕達に答えてきた。

「ここです」

「ここに一体」

「何が」

「ここは勸化堂といえます」

「勸化堂！？」

「それがこの道観の名前ですか」

「はい、そうです」

見れば馬さんの笑顔がさらにいいものになっている。それがまた僕達には不思議で仕方がなかった。けれど馬さんはそれをよそに僕達に話を進めるのだった。

「ここはね。私の恩人が祭られているんですよ」

「恩人っていいいますと？」

「台湾はかつて日本でしたよね」

今度言うのはこのことだった。もう僕達にとっては常識と言ってもいいことだった。

「戦争までは」

「ええ、そうですけれど」

「それが一体」

「だからなんですよ」

そしてまたこう言うのだった。

「私も日本人でした」

「ええ、それは」

「それは知っていますけれど」

「それが一体」

僕達にはどうしてもわからず首を傾げるばかりだった。話が全然見えない。

「戦争の時ですね」

今度は戦争の話になった。

「フィリピンにしまして」

「フィリピンにですか」

「確か激戦地の一つでしたよね」

僕達はこの馬さんに話した。このことも僕達は知っていた。一応は、であるが。

第六章

「そこにおられたんですか」

「死ぬことも覚悟していましたよ」

聞くだけで大変な話だということがわかる。それでもだった。何故か語る馬さんの顔は至って穏やかである。笑みを浮かべたまま、これがどうしてもわからなかったけれど、ここで馬さんはまた言うのだ。

「それがね。助かりまして」

「助かったんですか」

「ここにおられる方のおかげです」

またここにいる人のおかげだと言ったのだ。

「ここにね」

「！？ここにつて」

玲子がまた首を傾げた。

「ここにおられるってことは」

「この道観に祭られている方でしょうか」

僕は何となくだがこう考えた。道教は人を神として祭ることもある。その関羽や岳飛にしろそう。英雄や賢者を神として祭るのである。

「ひょっとして」

「はい、そうです」

ここで答えが出て来た。

「その方に助けてもらったのです」

「そうだったんですか」

「！？ちよつと待つて」

ここで玲子がどうしてもわからないといった顔で言ってきた。

「ここに祭られている人って台湾の人じゃないの？」

「いえ、違いますよ」

随分と穏やかな顔で答える馬さんだった。

「それは違うんですよ」

「違うって」

「じゃあ一体」

「日本の方ですよ」

「日本人が!？」

「道観にですか」

またどうしても僕達にはわからない話だった。

「日本人が!？」

「何でまた」

「フィリピンでの戦局は大変なものでした」

馬さんの話はここでまた戦争に戻った。

「本当に全滅覚悟で。玉砕命令まで出て」

「玉砕命令がですか」

「はい。それで私も他の台湾人達も全員死を意識しました」

こう僕達に話してきた。

「そして死ぬのなら潔く死のう。散華しよう」と

「そこまで思っておられたんですね」

「ですが」

馬さんの話がここで変わった。

「そこでここにおられる方に助けられたのです」

「けれど日本軍なら」

また玲子は首を捻る。これは僕も同じだった。僕にしる日本軍のことは少しではあるが知っているのが当時の台湾の人達が日本人として扱われていたのも知っているつもりだ。けれどどうも話がおかしかった。何かどうしても引っ掛かるものがあってそれが離れなかった。

「玉砕して最後まで戦うんじゃない?」

「それでどうして」

「海軍巡査隊長のですね」

海軍だという。けれど僕はこれには今は驚かなかった。

「広枝音右衛門警部ですが」

「それがここに祭られている方ですか」

「はい。その方が仰ったのです」

僕達に静かに語ってきてくれた、

「私達に生きて帰れと」

「生きて帰れ！？」

「そうです。私達が台湾人だからと仰って」

語るその目はじつと道観を見ていた。そのうえでの言葉だった。

「だから祖国に生きて帰れと」

「そう仰ったんですか」

「責任は自分が取ると」

「はい、そう仰って私達を返して下さったのです」

「そんな方がいたんですか」

これには玲子も流石にいつもの減らず口はなかった。

「台湾の人達の為に」

「方便だったと思いますよ」

馬さんはふとこう言った。

「私達を台湾人と言ったのはね」

「ええ、それはわかります」

このことは僕にもわかった。多分玲子にも。

「当時台湾は」

「紛れもなく日本でした」

そうなのだ。これは事実だった。台湾は日本領であり台湾の人達も日本人として法律的に完全に平等に扱われていた。李登輝元総統も日本の大学に通い陸軍将校になっている。

「ですから。日本人の筈なのに」

「馬さんを逃がす為にですね」

「おそらくそういうことだったと思います」

だからこそだったのだ。日本人ならば責任を問われる。しかし台

湾人としたならば。その広枝警部の心遣いだったのだと僕も思った。

「それで。私達を台湾人として」

「逃がしたと」

「それでですね」

今度は玲子が馬さんに尋ねた。

「どうなったんですか？」

「どうなったとは」

「広枝警部です」

やはり問うのはこのことだった。

「警部は。どうされたんですか？」

「アメリカ軍が上陸していましてね」

話はまずそこに戻った。

「つまり交渉する相手がいまして」

「そのアメリカ軍ですね」

「はい。台湾人だから日本人ではないからとアメリカ軍に言って」

「馬さん達の安全を保障してもらったんですね」

「そういうことです」

話はそういうことであつた。そうして馬さん達を助けたのだ。

「二千人いましたが皆それで助かりました」

「皆……」

「二千人もですか」

僕達はあらためて驚かされた。流石に二千人も救われたとは思わなかった。本当に広枝警部という人の素晴らしさを知った思いだった。

第七章

「そうです。その全員がです」

「警部に助けられたと」

「こうして私達はこの地に帰って来ることができました」
語るその目も言葉も温かいものだった。

「本当にね」

「それでですね」

また玲子が尋ねる。

「警部さんは」

「ここに祭られているということは」

僕はふと気付いた。神になるということはつまりだ。

「まさか」

「はい。亡くなられました」

やはりそうだった。そうでなければ祭られたりはしない。関羽に
しる岳飛にしる死んだからこそ、また非業の死だからこそ祭られる
ようになったのである。こうしたことはおおむね世界の何処でも同
じだと思う。人はその最後にこそ深い感銘を受けるものだからだ。

「私達を助けてくれた後で」

「左様でしたか」

「最後まで御立派でした」

馬さんの声が泣いていた。涙は目には流れていないが心に流れて
いた。

「最後の最後まで。潔く」

「そうだったんですか」

「最後まで」

「私達はその警部のことを忘れたくはありませんでした」
馬さん達の真心だった。

「だからこそ。ここに」

「祭られているのですね」

「その通りです。だからこそです」

「そうだったんですか」

「それで」

ここで僕達は完全にわかった。どうして馬さんがここに僕達を案内したのかを。

「それで僕達をここに」

「日本人として」

「私は。日本人でした」

馬さんはまたこのことを僕達に言ってくれた。

「日本人として戦いました。そして日本人に助けてもらいました」

「日本人に」

「日本は。好きですか？」

僕達に顔を向けて尋ねてきた。

「日本は。如何でしょうか」

「ええ、まあ僕も」

「私も」

「日本人ですし」

「やっぱり」

答えは一応僕達の中でも決まっていたしはっきりしていた。そういうことだった。

「好きです」

「あまり深くはないかも知れませんが」

「そうですね。それはいいことです」

馬さんは僕達の今の言葉を聞いて静かに、けれど嬉しそうに頷いてくれた。

「では。警部のことを忘れないで下さい」

「ええ、それは」

「絶対に」

僕達もそのことを馬さんに誓った。忘れられるものじゃなかった。

「忘れませんから」

「こんな素晴らしい人がいたなんて」

「私は、生きている限り警部のことを教え伝えていきます」
それが馬さんの誓いだった。

「警部に助けて頂いた御恩の為にも」

「馬さん……」

「そこまでされるんですか」

「宜しければ日本に帰られたならば」

「ええ」

「警部のことをお伝え下さい」

僕達に対して今度はこのことを御願いしてくれた。

「どうか。そして日本人が持っている素晴らしいさを」

「わかりました。何があっても」

「伝えます」

「はい、それだけは御願います」

何時しか僕達に顔を向けての言葉になっていた。

「何があっても」

「私達も」

僕達もまたこのことを誓い合った。僕達が知らなかった日本人のことを皆に伝えることを。今度の台湾への旅はただ台湾に來ただけじゃなかった。日本にも來た旅になっていたのだった。

約束した僕達に。馬さんはまたその笑顔を向けて声をかけてきた。

「それでですね」

「ええ」

「何ですか？」

「これが終わったらですけど」

話は次に移っていた。

「何処に行かれますか？」

「ええと、まあいい時間ですね」

「お昼なんかは」

「それでしたら飲茶なんかどうですか？」

にこやかに笑って勧めてきてくれた。

「飲茶は。また一ついいお店を見つけまして」

「あつ、いいですね」

「それじゃあ」

「勿論麵もありますよ」

これは欠かせなかった。やっぱり中華といえば麵だった。

「豚を使ったね」

「豚ですか」

「いいですね」

「昨日は海鮮でしたよね」

「御存知だったんですか」

「顔に書いてありましたから」

笑顔で僕達に言ってきた。

「だからですよ」

「そうだったんですか」

「はい。ですから今日は豚を」

また提案してきた。

「どうかと思ひまして。如何ですか」

「そうですね。それじゃあ」

「それで御願ひします」

「豚足なんかもありますしね。では」

「行きますか」

「そのお店に」

僕達は笑顔で勸化堂を後にした。広枝警部のことを思いながら。

警部は今もそこにいる。日本人の誇りをそこに残して。静かに山の中にいるのだ。そのことを思うと台湾、そして日本のことがいとおしくてたまらない。日本に帰って来た今もそう思っやまない。

観化堂の隊長 完

7

2008・11・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2827g/>

観化堂の隊長

2010年10月8日15時31分発行